

The way we work today

SPECIAL INTERVIEW

コクヨ・山下正太郎さんに聞く

グローバルオフィスから見る ワークプレイスの 過去と未来

近年、働く場のデザインは変化し、従来の画一的なオフィスとは異なる、多種多様な新しいワークプレイスが出現している。そもそもオフィスデザインは、歴史的にどのような変遷を経ているのか。そして今後、どのように進化していくのだろうか。世界のオフィス事情に精通する、コクヨ主幹研究員の山下正太郎さんに、欧米を中心とした最新の動向を語ってもらった。過去と現在、そして未来のワークプレイスを読み解いていく。

取材・文／佐藤千紗 ポートレート撮影／堀口宏明

PART.

1

歴史から読み解く 現在までの オフィスデザインの動向

オフィスの始まりは、18世紀後半の産業革命以降と言われており、時代の変化と共に多様化している。働く環境は、どのように移り変わっていったのだろうか。

国内における オフィスの変化とその背景

オフィスは、空間デザイン分野で最もイノベーションが起きていると言っても過言ではない。「ABW(アクティビティ・ベースド・ワーキング)」「コワーキング」「オープンイノベーション」など、新しい働き方を支える空間が次々と生まれている。なぜ、これ程までにオフィス環境は進化し、注目されているのか。その背景について、世界のオフィスを研究してきた、コクヨ主幹研究員で雑誌「ワークサイト」編集長の山下正太郎さんは次のように説明する。

——国内においては、第一に労働人口不足への対応という側面が強いでしょう。ワークスタイルの制度やオフィス環境の柔軟性を高め、生産性向上や人材確保に繋げることに企業の意識変化が進みました。働き方改革という法制度面からの影響も小さくありません。一方で、海外では以前からデザイン性の高いオフィスが多くありましたが、これは雇用に対する文脈が日本と異なるからです。特に欧米では、特定の業務に対して人を配置するジョブ型採用が中心。キャリアアップのために転職が一般的で人材の流動性が高く、社員の流出を防ぐためにオフィスを整備することが重要でした。対して日本の主流はメンバーシップ型で、長く勤めることを前提にした働き方です。しかし人手不足を背景に、いよいよ今いる人材の生産性を向上させるか、新たな人

材を確保し維持できるかに関心が高まってきました。

次に、イノベーションの問題が挙げられます。従来、日本企業はメーカー文化が強く、オフィスよりも生産設備への投資が優先されてきました。また、社員の創造性よりも規律を重んじるブルーカラー的なカルチャーが定着。しかし、「モノからコトへ」と言われるように、新しい価値観の提示やサービス主体のプロダクトが求められる時代になり、R&D(研究開発)やマーケティングなどの上流部門の環境に投資が向けられるようになった。

もちろん、テクノロジーの進展も大きく影響しています。ラップトップやスマートフォンによって、仕事の行為と場所が分離したことで、自由度の高い多様なオフィス環境が実現可能となりました。このように、働き方改革や仕事の創造性に焦点が当たり、今、オフィス環境が急速に変化しています。

四つの変遷からなる オフィスデザインの歴史

そもそもオフィス空間は、どのような変化をたどってきたのか。これまでのオフィスの形態を、山下さんに振り返ってもらった。

——RCAのオフィス研究の権威、ジェレミー・マイヤソン教授によると、働く場は四つの変遷を経ています。第一の形態は、経営学者フレデリック・テイラーの名前から取った「テ

イラリスト・オフィス」。産業革命以降の工場に倣い「効率性」を重視したオフィスで、情報処理の流れに沿ってデスクが島型に並ぶレイアウトが主流。日本企業の9割はもまだに、組織図をそのまま平面化したようなこのタイプを採用しているのが現状です。

第二の形態は、第二次世界大戦後の1960年代、ヨーロッパの好景気を背景とする「ソーシャル・デモクラティック・オフィス」。食事やアメニティーなどで人手不足を補おうと、初めてオフィスに「人間性」が意識されるようになりました。第三の形態は、1990年頃から徐々に見られるようになった「ネットワーク・オフィス」です。インターネットやモバイルツールが普及し、ワーカールのモビリティが高まった。オフィスは、リアルとバーチャルのバランスを取るような「柔軟性」が必要とされ、さまざまな用途を含むワークプレイスとして機能するようになりました。この頃からオフィス内だけで仕事が終わせず、ワークライフバランスなどの問題が起こるようになります。

そしてここ10年程の傾向を、マイヤソン教授は暫定的にワークとライフを分け隔てない「ミックス・オフィス」としています。現実／バーチャルやワーク／ライフのバランスを取るのではなく、積極的に統合していこうという思想です。私自身は単に統合ではなく、オフィスは多様な人材が混ざり合う生態系を形成する場「エコシステム・ハブ」の時代として、第四の形態を捉えています。

オフィスデザインの歴史

